

卷頭言

〈小特集〉

「グローバル化のなかの東アジア」研究会成果報告

Research Reports on “East Asia in Globalization” Preface

小特集「「グローバル化のなかの東アジア」研究会成果報告」は、立命館大学人文科学研究所の重点プロジェクト「グローバル化とアジアの地域」の、政治・経済グループ（旧：グローバル化と公共性研究会）の研究成果の一部をまとめたものである。この研究会は、学際的な観点から東アジア諸国における政治・経済・社会の特徴およびその動態を分析し、その理論的含意を検討することを目的としている。これまでは、「グローバル化や新自由主義化などの環境変化に対して、日韓中の三国ではどのような対応がなされ、そこにはどのような共通性と差異があるのか。また各国はどのような課題を抱えており、より良い社会、そしてより良い東アジア関係を構築するためには何が必要か」などを検討してきた。その成果は、中島茂樹・中谷義和編『グローバル化と国家の変容』（御茶の水書房、2009年）、篠田武司・西口清勝・松下洸編『グローバル化とリージョナリズム』（御茶の水書房、2009年）、中谷義和・朱恩佑・張振江編『新自由主義的グローバル化と東アジア』（法律文化社、2016年）という形にまとめ、発信してきた（その他として、『立命館大学人文科学研究所紀要』の99号、116号など）。研究会の活動は、研究会メンバーによる研究報告会や外部研究者を招いた学習会などの日常的なものに加えて、大きな柱である日韓中三大学（日本：立命館大学、韓国：中央大学、中国：チナン大学）の国際共同研究から構成されている。国際共同研究では、毎年持ち回りで国際シンポジウムを開催し、その年度の研究成果を互いに持ち寄り、共有してきた。

小特集「「グローバル化のなかの東アジア」研究会成果報告」は、2019年

3月23・24日に立命館大学で開催された、国際シンポジウム「グローバル化のなかの東アジア3国の動態：社会経済の変容と政治的再統合の比較アプローチ」¹⁾で報告された論文や当日の様子をまとめたもの、そして過去の国際シンポジウムで報告された論文などから構成されている。中谷論文は、国家論の観点から、現代世界における排除と包摂のダイナミズムを検討するものであり、東アジア諸国の現状と課題、今後の展望を考える上で示唆的である。代論文は、サーベイ調査とインタビュー調査を通じて、中国系カンボジア人のアイデンティティの変容を検討したものであり、東アジアにおけるヒトの移動がもたらす社会的帰結を考察する上で重要なものといえる。松野論文は、国際経済学の観点から、日本と中国の経済関係の変容を検討するものであり、東アジアの経済関係の現状を理解し、今後の経済協力の可能性を検討する上で有益といえる。加藤論文「Social Problems and Welfare State Transformations in Japan: From the Point of Welfare State Theory」は、福祉国家の変容という観点から、日本の社会問題の背景を検討するものであり、日本で社会的排除が生み出された文脈を理解する上で役立つ。また、西口による総括コメントは、国際シンポジウムの位置づけ、意義および成果などを明確にするものである。なお、加藤論文「On Theoretical Possibility of East Asian Welfare Regime: from the Point of Comparative Politics」は、「東アジア福祉国家論」の理論的意義を批判的に検討するものであり、東アジア諸国を対象とした研究がもたらす知の可能性を考える上で示唆的といえる。

小特集「「グローバル化のなかの東アジア」研究会成果報告」は、学際的な観点から、東アジアにおける政治・経済・社会の現状と課題、今後の展望を検討するものである。この小特集が、今後の学問的発展および研究交流、社会实践などに貢献するものであることを期待したい。

注

- 1) シンポジウムには、日韓中三大学の研究者に加え、学内・学外からの研究者からも多数の参加があり、盛会のうちに終了した。シンポジウムの開催にご尽力いただいた研究会メンバーおよび事務局の皆さんに心よりお礼申し上げたい。

立命館大学産業社会学部・准教授

加藤 雅俊

